

学 位 論 文 題 名

Edward Bulloughの美学—歴史的・思想的背景とその展開—

学位論文内容の要旨

第一章では、プロウの「心理的距離」概念（以下「距離」と略す）の思想的背景を確認する。プロウは想定される理想的対象ではなく、実在の対象に個人が独自の側面を見出すことに着目している。これは眼前の対象と観者との関係を絶対的なものとする立場である。また私たちと芸術作品という対象との「距離」は、単に人間の相互関係の模倣ではなく、対象と自己との関係によって得られる経験もまた一つの現実であることを論じる。

第二章では、プロウの初期の論文「質料と形相」（1904年）から、彼にとって芸術作品における「形相と質料」に相当するものを明らかにする。彼の区分を明確にし、その独自性を示すためカントの「形式と質料」、および「美的理念と理性的理念」の体系と比較し図式化した。またプロウの美学に心理学的・社会学的方法の可能性を示したヒルンの著作を参照し、「自己目的性」の概念が19世紀末から20世紀初頭においては社会的な発展の尺度としての意味を含んでいたことを指摘する。

プロウは1907年よりケンブリッジ大学にて美学の講義を行なっている。講義のなかで彼は、「美学」の目的とは主体の美的意識とそれによって表される態度を系統的に研究することであるという。そして、芸術の機能は私たちを自らの美的意識に留めることであるとし、それは芸術家や受容者の目的や意図からは独立していると論じている。

またプロウは芸術作品に対してであれ、現実生活のなかであれ、一つの心理的態度に美的価値を見出している。その態度とは「二重化された意識」を持つことであり、人々が「演技」を行なう際に生じるとされる。この「演技」とは「行為それ自体を目的とする行為」を意味しており、またそれゆえに「美的」と見なされるものである。この芸術の機能と心理的態度における自律性、自己目的性が、私たちの「生命」の表れにつながっていることを論じる。

第三章では、プロウの美学理論の要となる概念「心理的距離」について考察する。距離を限定する要因として見なされ得る、個別性と普遍性、対象の形態と遊戯衝動、身体と精神に関して古代および近代の美学理論をたどり、かつそれぞれの理論とプロウの距離の定義との相違点を示す。

距離は、主体である私たち個人とその触発源泉である対象との間にあるものと定義されるが、「触発源泉」には対象を把握する私たちの能力と対象そのものという二重の意味が含まれている。さらに芸術作品の「享受と制作の両方において最も求められることは、その消失なしに距離を最大限減らすことである」という一文の意味をめぐり、演劇を事例として具体的に心理的距離のはたらきについて考察する。その後、距離を主体の行為によるもの、あるいは対象の特質によるものとする後代の研究者たちによるいくつかの解釈を比較検討し、距離概念の適用範囲と意義を明らかにする。

第四章では、プロウが初期の研究において行なった実験美学を取り扱う。対象をできるだけ単一の要素へと分解し、それに対する心理的反応もまたいくつかの心的能力に区分される実験において、双方の構成要素は等価なものに見なされていた。彼もこの要素主義のなかで古典的価値観を心理的機構に対応させようとした感否めないが、その試みから「感情移入」論と「距離」による受容と

の差異を提示することが可能になったといえる。

また、彼が実験によって見出された「性格的アスペクト」を最も「美的」な領域に含まれるとしたことに関しても検討を加える。プロウの論じる性格的アスペクトを含めた美的経験は、単に対象に応じて移り変わるものではなく、個人の生そのものに内在して変化を遂げるものであった。

第五章では、芸術と過去の出来事やその記録、すなわち「歴史」との関係をプロウがいかに捉えていたかを検討するため、1913年に発表された「発生論的美学」についての論文を見ていく。その論文では美的価値の発展とその要因を探ることと共に、近代以降の西欧社会において作り出された美的価値の相対化も試みられている。考察では、美的価値が社会的制約から高次の個人的制約へと変遷したとされる背景として、分業制や都市化が人々に与えた意識の変化について論証したデュルケムの理論を参照する。そのうえで、プロウは美的価値の形成に関して個人的要因と社会的要因のいずれかに偏ることなく、それらの要因の組み合わせと相互作用を考慮していることを指摘する。

また近代言語の教育における文学の意義について書かれた論文「文学と歴史の関係」（1920年）も手がかりとした。プロウは文学の本質的価値や存在理由は文学それ自体にあると考えている一方で、作家の生きた時代の出来事や理念に関する知識を得るため、歴史を学ぶことの重要性を指摘している。文学史を学ぶことも、文学と歴史の双方を媒介するものとして捉えられる。知識の獲得から感情および経験の成熟へという段階的成長が目指されており、これは知識を得ること以上に、感情および経験を深めることを追求する態度といえる。

学位論文審査の要旨

主 査	教 授	北 村 清 彦
副 査	准教授	谷古 宇 尚
副 査	准教授	村 松 正 隆

学 位 論 文 題 名

Edward Bulloughの美学—歴史的・思想的背景とその展開—

学位論文提出後、審査委員会が発足し、その後5回の審査委員会を開催した。第1回審査委員会では審査日程を調整し、提出論文を検討するための十分な時間確保に努めた。第2回委員会では論文内容の検討および問題点を整理し、口頭試験に向けた準備を行った。口頭試験は、二日に分けて計約6時間かけて実施され、概念規定の厳密さ、論理の整合性、使用されたテキストの妥当性、翻訳の正確さ、結論の正当性などについての質疑応答が行われた。第3回委員会ではこの口頭試験の結果を踏まえて、学位授与の判定を行い、審査委員会は全員一致して本申請論文に博士（文学）の学位を授与する事が妥当であるとの結論に達した。その後、主査が審査結果報告書（案）を作成し、第5回委員会でその表現等の修正を行い、審査報告書を確定した。2012年9月5日文学研究科教授会で審査結果の報告を行い、慎重に審議した後同年9月21日同教授会において投票の結果、本論文申請者に対する博士（文学）の学位授与が決した。

本論文はエドワード・プロウ（Bullough, Edward. 1880～1934）の美学理論を19世紀から20世紀にいたる思想史のなかに位置づけ、その今日的可能性を明らかにすることを目的としている。プロウは1912年に発表した論文「芸術の一要因と美的原則としての『心理的距離』」によって、日本の美学界においても実験心理学の立場から提唱された「心理的距離（Psychical Distance）」という概念とともにその名を知られている。しかしながら、その「心理的距離」概念の内実についても、また実験美学以外の彼の美学思想全体についても必ずしも十分な理解が行き届いているわけではない。それゆえ本論文の第一の成果は、プロウの初期から晩年にかけての理論のそれぞれを丹念に考察することで、彼の論の形成に影響を及ぼした美学・心理学理論をたどりながら、彼の美学を美学史のなかで包括的に体系化したことである。すなわち、カント美学の「無関心性」の概念とプロウの「心理的距離」概念とが、根本的に立場を異にしながらも通底し合っている論理構造を有し、またシラーやショーペンハウアーの思想との連続性をも確認することができるのである。

また翻ってプロウ以降の、ランガーやゴンブリッチら英米圏の美学への影響をも視野に入れることによって、プロウ美学理論をより大きな文脈のなかでその全体像を描き出すことにも成功している。これが本論文の第二の成果である。その結果、プロウの「心理的距離」概念が今日においても、例えば演劇における俳優の演技を考察する際にも一定の有効性を持っていることが主張された。

一般的に、芸術とは「それ自体を目的とする」実践的な目的性を持たない自律的活動であると説明される。しかしプロウの「距離」は現実から遊離することではなく、ある対象における芸術的・美的価値の所在へと意識を集中させることによって、そこから何かしら生き生きとしたものの発見を促すのである。さらにプロウは、歴史という時間的距離を持った事象に対しても当時の実際の行為や文物から近づきうる「現実」を捉えることの重要性を論じる。このようにして、プロウの「距離」概念は、現実に応じ、空間的な隔たりのみならず時間的隔たりにおいても有効性を持っているという、プロウの「距離」概念の新たな理解を提示しえたことが本論文の第三の成果である。

ただし、プロウの論を検証するために、カント、ショーペンハウエル、シラー、フッサール、ヴィットゲンシュタイン、ベルクソン、ロブ・グリエ、ランガー、ゴンブリッチなど数多くの哲学者、思想家が取りあげられているが、それらとプロウとを結びつける根拠ないし必然性が希薄であるために、議論がその深層においてかみ合わない部分が多々見られた。しかしそれは参照すべき論者のそれぞれが哲学的に根本問題を議論しているためもあり、論者の今後の研究の深化によって解決されるべき課題である。また本論文にとって重要だと思われる、質料、形相、二律背反、感情移入、把握、適応、個人的 (personal)、不個人的 (impersonal)、非個人的 (non-personal) といった概念の規定について曖昧な部分が残っており、論文全体として晦渋な文章といわざるをえない。しかし二日にわたって行った口頭試験によって論者が十分にその内容を理解していることが確認できたので、それも本論文の本論文の根本的瑕疵とまではなっていないと判断された。

以上の審査経過により、本論文に博士（文学）の学位を授与することが妥当であると審査委員全員の意見が一致した。